

近代国民国家のイデオロギー装置と国民的偉人

— 楠木正成をめぐる明治期のふたつの出来事 —

What is Loyalty? : ideological state apparatus and its contradiction in modern Japan

森 正 人

要旨

本稿は1860年代から1900年代初頭日本のいわゆる国民国家創設時において、楠木正成がナショナルアイデンティティ創出のためにどのように象徴化されていったのか、「国家のイデオロギー装置」と「アンビバレンス」の概念を用いながら詳述する。とりわけ1870年代初頭の湊川神社創建過程と1890年代に開始される宮城前への銅像設置過程に注目する。江戸時代との連続性を保ちながらも、近代国民国家において湊川神社が創建されたことは、一方で西洋近代を受容しながら、他方で古代の政治システムを復活させるという矛盾を滑らかにした。さらに近代国民国家において不可欠なナショナルアイデンティティと忠誠の創出のための物質的イデオロギー装置としても機能することが期待された。神社、石碑、天皇の行幸はイデオロギーを再生産していったのである。19C末に鑄造が開始された楠木銅像もまた、同じくイデオロギーの再生産の役割が期待されたが、とりわけ楠木が乗馬する馬種をめぐる議論は、西洋近代に埋め込まれた非西洋近代国家の模倣とそのアンビバレンスを示していた。

I はじめに

1903年10月11日の早朝、東京の宮城（現在の皇居）前に設置された楠木正成銅像近くの芝生上にて、一人の男が刃物を自らののどに刺して自殺しているのが見つかった。男は神田区錦町に住みガス会社に勤務していたが、持病のてんかんを苦にして自殺を図ったものと見られ、遺書を所持していた。発見後すぐに永楽病院へ搬送されたものの、介抱のいかなく死亡した。

この男の自殺に関しては、その発見後二日にわたって身元や遺書等が新聞紙上で報道され、「誓つて楠公と慕田を共にせんと心の誠を詩に寓せたる彼の海坊僧清狂が亜流」と評された（『読売新聞』1903年10月12日）。当時の読売新聞は、政府や外国の事件のほかに東京都周辺の事件を中心に扱っていたが、新聞社があえてこの自殺を二日にわたって報道したのは、それがなされた場所とその行為が国家にとって重要な意味を持ちえたからであった。それはすなわち、楠木正成と国家との結びつきに支えられていた。

本稿は、幕末から明治時代、大正時代にかけてのいわゆる日本近代国民国家成立期における国民統合とその矛盾を明らかにすることを目的とする。とくに、中世の武将である楠木正成に注目し、それが国民統合の象徴としてみなされていく過程を追いながら、そこに表れる西洋化を目指す日本の矛盾にも言及したい。

アンダーソン（1997）による国民国家の定式化によると、1648年のウェストファリア条約以降、国民国家を単位とする世界秩序が登場し、次第に世界中にそれが浸透していく過程では、

国民国家を基礎づける文法が見られるとされる。『想像の共同体』第二版にモジュールとして新たに付け加えられた人口統計、地図、博物館は、個々人を国民へと統合する物質的なイデオロギー装置として機能した。

ここでアンダーソンのアイデアに、アルチュセールのいう「国家のイデオロギー装置」を差し挟むことは本稿にとって意義深いことであろう。アルチュセール（2005）は国家装置と国家のイデオロギー装置を区別し、前者では抑圧が機能しているのに対し、後者では前者によって保証されながらも矛盾をはらんだイデオロギーによって機能すると指摘する。両者を厳密に区分することはできないが、前者はおもに公的領域、後者は私的領域において機能するとされ、とりわけ社会的諸関係の再生産の過程が強調されるのである。つまり、イデオロギーは物質的装置を通して個人に主体となるべく呼びかけ、不断にくり返されるプラチックを通して支配は再生産されるのである。

アンダーソンが国民国家のモジュールとして付け加えた地図、博物館も、国民の起源と現在との連続性を見せつけるために人びとに国民という主体となるよう呼びかける。そしてこれに近い機能を果たすものとして本稿で取り上げるのが、国家を代表=表象する国家的偉人である。過去に存在した特定の人物を表象することで、国民のあるべきモデルを構築し、個人にそれとなるべく呼びかける。しかもそれは不断に再生産される。ここでは国民統合装置の要諦としての国民的偉人がどのように構築されたのか注目したい。

筆者はすでに、近代国民国家の中で真言宗の宗祖である弘法大師が、「日本文化」「日本精神」と結びつけられていく様相を明らかにしている。それは日本文化、日本精神あるいは国体という具体的な意味内容をとまわらないものを実体化していく過程であり、しかもこれには国家という権力主体だけでなく、マスメディアという媒介的な主体すらも関わっていたことを提示した（森 2005）。

弘法大師が明治初期に、真言密教という外的要素を持ち込むことで日本の純粋性を汚したものと見なされていたのに対して、本稿が注目する楠木正成は、天皇に忠誠を尽くした人物としての評価を江戸時代を通して得てきた。たとえば、南朝と楠木の側に偏った太平記によると、現在の大阪府千早赤阪村に生を受けた楠木正成（1294～1336）は、鎌倉幕府の打倒を目指した後醍醐天皇のもとで功績をあげる。倒幕後に足利尊氏をはじめとする武将が報償への不満から北朝を擁立する中で、楠木は南朝に残り悲劇的な最期を遂げ、さらに息子の正行も父親と同様に南朝側に立ち、やはり悲劇的な最期を遂げるというものである。こうした美談と忠誠の物語は江戸時代末期よりとりわけ強調され、明治から第二次世界大戦終了時まで続く近代国民国家においては国民統合のための役割の一翼になったのであった。

本稿では 1860 年代から 1900 年代初頭に時期を限定し、ふたつの出来事を中心にすえて、国家的な偉人として楠木正成がどのように扱われてきたのか、またその過程に映し出された近代国民国家日本のありようを示すつもりである。幕末期から明治初期にかけて楠木が天皇への忠誠の象徴として注目されていく過程については、すでに招魂社の成立過程を明らかにする宗教史的研究で言及されている（小林・照沼 1969、村上 1974）。さらに、楠木を祀る湊川神社から依頼を受けた森田（1987）は、単なる神社史にとどまらず楠木正成を社会的文脈の中に位置づけることに成功している。

ただし、あらゆる研究はつねに時代の思潮に状況づけられており、あらためて別の視点から問題を捉えることは必要される。したがって、本稿はこうした先行研究を十分に参照しつつも、

あくまで楠木正成を中心に据えて、先述の目的に沿って、先行研究では紹介されていない出来事や史料を提示するつもりである。先行研究で言及されるすべての出来事を網羅することは本稿の目的ではないし、近代資料を用いるものの歴史学的作法にとらわれるつもりもない。

前稿では権力がマスメディアによって媒介される様相をとらえたが、今回はあくまで国家が物質的装置を介してナショナルアイデンティティを作り出す過程を追いたい。したがって、理論的枠組みとしては後退していることは十分理解しているが、本稿を起点とする一連の研究において重層的な権力のありようを示したい。本稿はそのための重要な出発点であると考えている。資料として、当時の新聞記事や刊行物のほか、国立公文書館に所蔵されている公文書を用いる。先行研究ですでに紹介されている資料も多く含まれているが、すべて改めて目を通したことは言うまでもない。

II 「忠臣」としての楠木正成

(1) 楠社の成立

江戸時代に展開する尊皇思想において、楠木正成への評価は高められた。とりわけ、『大日本史』を編纂した水戸学において勤王の士として楠木が位置づけられ、1692年には楠木の死地であるものの荒廃をきわめていた湊川に水戸光圀が石碑を建立している。尊皇攘夷思想が展開する江戸時代末期になると、天皇への貢献者の魂を慰霊しようという思潮が高まり、招魂祭が各地で開催されるようになった。この招魂祭においてとりわけ重視されたのが楠木の慰霊であり、記録では1847年より楠公祭が執り行われている。そして、1868年に起こった戊辰戦争において新政府側に多数の死者が生じたことから、1869年の東京招魂社を皮切りに各地に招魂社が創建される。これらが靖国神社および護国神社へつながる（小林・照沼1969；村上1974）。

招魂社の思想は楠木正成の慰霊と深く関わっており、楠木を祀る神社の創建は江戸時代末期より薩摩藩、尾張藩、水戸藩はそれぞれ楠社の創建を建白していた。薩摩藩の建白に対しては朝廷が1867年に湊川に社殿を創建することを聴許しており、幕府が楠社を京都に創建することを認めるのは1867年であった。こうして楠社創建の気運が高まるなか、明治政府が誕生した年、1868年4月21日に太政官が神祇事務局に楠社創建を命じ、これにより国家による楠社創建が決定されたのである。

いつ楠社の場所は、1868年の文書ですでに決定されていた。1871年2月には地ならしの儀式が執り行われ、本格的に創建が着手されていったのである（藤巻1939）。創建に際しては多くの献納がなされ、とりわけ周辺の49町から7049本の手ぬぐいが献納され、さらに東方は深江や横屋、西方は須磨や妙法寺などからも出仕されたことは、各戸が自主的に行ったのか、各町で何らかの力が働いたのかは不明であるとはいえ、ローカルを巻き込みながら楠社の創建がなされたことを物語っている。そして、ナショナルな象徴にローカルを自明のこととして埋め込んでいくことこそ、ナショナルアイデンティティ創出において肝要であると指摘できよう。

ところで、1870年4月4日、当時の最高行政機関である太政官の下に設置された軍事管轄の兵部省から太政官へ伺が提出されている。そこで1868年より招魂社の造営が開始されたことを感謝する文言とともに、楠木だけでなく彼に連なった者たちへの贈位、さらに楠木を祀る招魂社造営が速やかになされることを願い出ている。

兵部省は、1868年より招魂社へ配祀されるべき人物のリスト作成を開始していた。同文で

は、先行する戦死者のリスト作成が終了すれば、楠木の部下であった名和、菊地両氏をはじめとする武将も招魂社にできるだけ速やかに配祀するよう求めている。さらに同文では、戦死者だけではなく、たとえば江戸時代中期の勤王思想家である高山彦九郎といった人びとも祭祀しなければ「不相濟畢竟御不相当ノ事ニ相成候」であるとも申し出ているのである。

これに対して、同年4月13日に神祇官は「別紙兵部省ヨリ申出候楠公以下南朝忠節ノ輩招魂社ヘ配祭ノ儀ハ既ニ去辰年楠社御造営御布告ノ通ニ付不及其儀事ト相考候」という文書を送付している。つまり神祇官の最終的な判断は、戊辰戦争で天皇のために戦った複数の英霊を祀る招魂社に楠木正成を合祀することは不適であり、建設中である楠木正成個人を神として祀る湊川神社がそれにふさわしいということであった。そして、「兵部省ノ心得ヲ以右社境内ヘ新社取建儀ハ格別ノ事」であるが、「過日諸官員葬地モ御渡相成候儀ニ付官員埋葬且小社取建ノ儀ハ見合候方ト考候」と、華族百官の神葬地についても同様の要請があったが、楠木敷地内に楠木の部下たちを祀る社殿を建設することとともに見合わせる事が望ましいとされた。こうして楠木正成のために楠社が造営されることが決定されたが、その一方で太政官が求めた楠木正成以下の諸将への贈位に関してはあいまいなまま残されている。

新設された招魂社は当初「楠社」と呼ばれており、森田（1987）によると国学者であり当時神祇官に出仕していた矢野玄道が名称を「大楠霊」とするよう提案し、また他の人びともその名称を思案していた。さらに堺県知事の小河一敏はこれを「南木神社」と称し、さらに楠木の息子、楠木正行を祀る「小南木社」を河内に作る案を提出している。これが後の四条畷神社の創建につながっていくことを森田（1987）は指摘している。名称に関するこうした一連の議論は、一方で過去との連続を示し、他方で国家における新たな再位置づけを端的に示しており、さらに敷衍すれば新たに誕生した国民国家における神話の創出過程を示しているとも言えよう。

森田（1987）は紹介していないが、1872年4月22日に福羽教部大輔と嵯峨教部卿が、その年に新たに設置された最高政治機関の正院に湊川神社の神霊代について意見を提出している。それによると、楠木の遺物だけでなく「同氏ハ忠烈出群ノ儀ニ付正成神霊ト宸筆ニ被為染」を神霊代とするのが適当ではないかといものであった。最終的に神霊代となったものは筆者には不明だが、湊川神社造営に関して、少なくとも政府内には大きな関心が寄せられていたことが分かるだろう。

1872年5月24日、湊川神社は盛大な鎮座祭を行い、楠公忌日にあたるその翌日には初の例祭が開催された。この日、太政官はこの神社の名称を「湊川神社」、社格を別格官弊社とすることを正式に達している。湊川神社創建の動きは、菊池氏を祀る菊池神社（熊本県菊池市：1870年創建）北島・児島両氏を祀る阿部野神社（大阪府大阪市：1882年創建）等に影響をあたえていったのである（森田1987）。

（2）忠誠の可視化

湊川神社鎮座祭3日後の5月28日、湊川神社を造営・管理する兵庫県は教部省へ次の文書を送付している。

湊川神社境内ニ有之候楠公石碑、従来両覆屋根外圍専別紙甲印図面掛紙ノ通修理有之候、追々及破損不潔ニモ有之且同社御造営及落成候ニ付テハ、堂宇二等シキ建物ヲ設ケ、衆庶ノ拝見ヲ妨候ハ不都合ト相考候間、在来ノ分取除乙印掛紙ノ通取建可申哉、又ハ両覆ナクシテ元図

ノ通取計候方ニ候哉、相伺申候否至急御差図有之度候也

つまり、湊川神社境内に存在する楠公の石碑は、従来は図 1b のような状態にあったのだが、破損したり汚れたりするおそれがあることから湊川神社竣工にともないそれを堂宇のようなもので覆っている（図 1a）。しかしこれでは人びとがせっかくの石碑を拝み見ることができないので、これを取り払って図 1c のようにするかあるいは従来の状態に戻す方がよいと考えるので至急指示してほしいということである。これに対して 1872 年 6 月 23 日、教部省から正院へ次のような文書が提出された。

兵庫県管内楠公石碑建物ノ儀ニ付別紙ノ通図面相添伺出候、右ハ尋常石碑ノ比ニ無之候ハバ、左ノ通及指令度存候此段相伺候間速ニ御評決有此度候也

これを受けて、兵庫県 6 月 24 日、兵庫県に図 1c のようにフェンスを取り付けて管理するよう指令がなされたのである。文章からはこの石碑が「尋常石碑」とは比べものがないという国家の意思が読み取れよう。

これは一見すると些細な申し出とそれによる建造物の修正のように思われ、これまで取り上げられてこなかった出来事であるが、ナショナルアイデンティティの育成という意味では看過できない。天皇への忠誠を人びとに直接的に見せるということが、人びとに国民たることを呼びかけるために必要なのであり、その石碑をはっきりと見せるのに十分な施設が必要だと考えられたことを暗示している。ましてや、それが汚された堂宇に囲まれているという事態は、決して好まれざる事態であったに違いない。

湊川神社は神戸市だけにとどまらず、東京へ進出していった。湊川神社創建の 1 年後、1873 年 6 月 4 日に、当時の宮司折田年秀が教部省へ湊川神社の遙拝所を東京に建築する許可を願い出たのである。折田は、西洋から文明とくに合理性を旨とする学問が流入する近代化の過程において、日本の国体危機に陥る可能性があるとして、「教化ノ一助」として楠公遙拝所を東京都に設置したいと述べている。場所は、東京都第一大区十三小区二丁目に住む牧野康民の邸内であり、それを譲り受け、東京府へ申請も済ませており、あとは教部省からの許可を得るだけであった。教部省は「全ク私祭ノ儀ニテ差支無之筋」として聞き届けた。ただし、西洋文明に

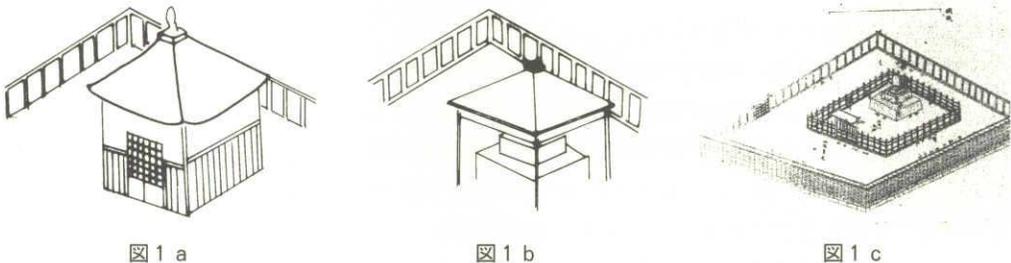


図 1 兵庫県によって提出された楠公石碑周辺の図案

出典) 兵庫県より教部省への伺 (1872 年 5 月 28 日; 国立公文書館所蔵文書)

注) a, b は不鮮明であったため筆者がトレースした。

Figure 1. Designs of surrounding architecture of the monument by Hyogo prefecture in 28 May 1872 (in National Archives of Japan; figure a and b were traced by the author).

よる国体の危機という問題構制は当時のクリシェであった。しかも湊川神社だけでなく、霧島神社等の多くの神社がこの時期に東京府への遙拝所設置を願い出ていたことが、公文書館の前後の記録から分かる。

また、1874年9月には陸軍が桜井の駅での楠木親子の別れの図を印刷している。このように1860年代末から1870年代初頭は、楠木を可視化するための基礎づくりの時期と言える。そして、この時期の楠木の可視化において最も重要な契機は天皇による湊川神社への来訪であった。それは、新たに創建された湊川神社の重要性と、楠木が体現する天皇への忠誠の両方を可視化したからである。以下、藤巻（1939）と筆者が収集した公文書史料にもとづき跡づけたい。1872年、伊勢、京都、大阪、九州、香川、神戸というルートで明治天皇による行幸が行われ、神戸においては湊川神社へ立ち寄ることが期待されたが、暴風雨のために予定が狂いかなわなかった。次の行幸は1877年に行われ、神戸港よりの帰航に際して湊川神社へ立ち寄ることが再び期待された。2月5日、湊川神社より兵庫県令森岡昌純へ

就テハ今般聖上西京行幸還御ノ時、日本港停車場ヨリ御通輦ノ御路次門前筋ヨリ当社正門マテ聊七拾間、何卒本社へ御臨幸被為在ニ於テハ、本県ハ素ヨリ全国ノ人民愛国忠義ノ赤心ヲ服膺仕、当今人道世教ニ於テ幾分ノ恩頼ヲ可奉蒙儀ト存奉候間、宜シク御執奏可被下（以下略）

との要望が出され、兵庫県はこれを行在所へ同として送付した。式部寮はそれに対して

本文湊川神社奉幣ノ式既ニ相済候上、更ニ臨幸相願候ハ厚キニ過キ候儀ト存候、然共思召ヲ以テ臨幸被為在候儀モ或ハ可有之哉、尚宮内省ニテ評議有之度候事

と、同年1月28日に神武天皇陵参拝および孝明天皇十年祭に際して、神戸港に上陸した天皇が勅使を湊川神社に遣わし、奉幣を献じていることで十分だという認識を一応示している。そして、そのうえで宮内省で評議したこともうかがえる。

こうして天皇による巡幸の可能性が巡ってきたが、同年2月に西南戦争が生じたために天皇は京都に約半年滞在することとなり、予定は大幅に狂うこととなった。そして結局、同年7月28日に天皇が神戸を出港する際には湊川神社へ立ち寄らない、という通達が式部寮より兵庫県に出されたのは7月20日だった。

天皇による湊川神社への臨幸がなかったのはその3年後、1880年7月11日であった。6月に山梨県、三重県、京都府を行幸した天皇は、神戸港にて東京へ向かう軍艦に乗るために神戸市栄町に宿泊し、兵庫県庁、神戸師範学校、神戸地方裁判所とともに湊川神社へ立ち寄ったのである。しかもこれに際して、楠木正成は当時の太政大臣の位階に相当する正一位を贈位され、これを祝して湊川神社は翌月2日に臨時大祭を行った。

こうして象徴化された楠木正成を、当時の人びとはどのように認識していたのだろうか。1892年、宮内省が楠木の血統を調査したところ、50名以上が自らを楠木一族の血をひくものとして系図や古文書等を添えて届け出た。しかしながら「未だ一人の正統者なし」であったという（『読売新聞』1893年3月23日）。自らを楠木一族であると名乗り出た人びとの家に古くより伝えられていた文書類が偽物であったのか、それとも名乗り出た人びと自らが偽造したの

かは定かではない。しかし、天皇へ忠義を尽くした人物として人びとに広く受け容れられていたからこそ、宮内省の呼びかけに 50 名以上が名乗り出たのだと考えられよう。

さらに、1892 年には次のような新聞記事が得られた。

京都下京区廿八組下馬町の中野源助方に祖先より伝はる二個の宝物あり、一は鎧の片袖にして他の一は兜の前に装うべき直径三寸計りの古鏡なるが、共に楠河内守正成公の遺物なりと称し此上なく珍重し居るよしにて先年九鬼宝物取調委員長が巡回の砌り鑑定を請ひしに鎧の方は一応取調の上ならでは何とも判断し難しとの事なりしよしを伏見稻荷神社の宮司某が打ち聞き頻りに所望すれども源助は頭を振り楠公を祭れる湊川神社へ寄附せんと決心したる由を神戸の同神社へ申し入れたりと（『読売新聞』1892 年 8 月 13 日）

九鬼隆一が宮内庁臨時全国宝物取調委員長に就任するのは 1888 年、帝室博物館長に就任するのは 1889 年であり、日本の文化財行政を一手に握る人物であった。その九鬼が京都の一民間人の家に伝わる鎧と古鏡をわざわざ鑑定した理由には、当時の日本の古物が海外に流出していたことへの危惧に加え、それが楠木正成に関わる事物の可能性を有していたことも挙げられよう。そして鎧が楠木のものである可能性が捨てきれないという判断が下ったとき、伏見稻荷神社の宮司がそれを所望したことことから、楠木に関わる事物に対する人びとの評価を読み取ることができるだろう。さらに、所有者がその要求を拒否し湊川神社へ「寄附」したことからは、楠木とそれを祀る湊川神社に対する所有者の強い認識が理解できるだろう。

III 皇居前への楠木銅像設置過程

(1) 面貌をいかに描くか

現在の皇居、二条橋近くに鎧兜に身をまとった馬上の楠木正成の銅像は置かれている（図 2）。

この銅像には、1890 年に三井財閥が愛媛県の別子銅山の開抗 200 年を記念して、楠木正成の銅像を鑄造し宮内省へ寄附することを決定したという説明が付されている。しかし当時の読売新聞を見ると、その鑄造過程はそれほど単純ではないことが分かる。

1891 年 8 月 5 日の読売の新聞記事には、「皇城の正門外に古来名士の銅像を設置するの議一と度宮中に起りて」とあり、楠木正成以外の歴史的な人物の銅像を設置するという議論が起



図 2 皇居二重橋前の楠木正成像

Figure 2. The bronze statue of Masashige Kusunoki just outside *Kokyo* (Imperial Palace)

こっていたことが分かるが、詳細は不明である。皇居は 1920 年代から次第に天皇イデオロギーを可視化する役割をにないはじめたが、この時期はまだこうした役割を積極的にこなしてはならず、周辺は荒廃し無用の長物とされていたとされる（原 2003）。しかしながら、この銅像制作をめぐるプロセスにおいては、銅像をどこに設置するかという議論を含めて、皇居を象徴化しようという意図もかいま見える。だからこそ、本稿の最初に紹介したようにこの銅像前で自殺した人物の報道がなされたのである。

銅像制作の議論が進むなかで、鎧兜に身をまとい乗馬する楠木の姿を銅像にするというアイデアが岡倉覚三と川端玉章によってひねり出され、「最も優等なり」と評価された。両者には賞典金 50 円が支払われた（『読売新聞』1891 年 8 月 5 日）。さらに同記事には、当時、銅像制作費におおよそ 3 万円必要だと予想されているものの、それを帝室が出すのか美術協会が出すのか、あるいは別の団体が出すのか未決であると付されている。おそらくこの段階で、三井財閥が製造費寄附を申し出たものと考えられる。

表 1 は、読売新聞におけるこの銅像制作に関わる記事を示している。1892 年 5 月 20 日の記事で、この銅像制作を東京美術学校（現在の東京芸術大学）に委託したことが知らされた。具体的なスタッフとして、楠公の木型制作に高村光雲、山田鬼斎、石川光明、馬の木型制作に後藤貞行、鑄造に岡崎雪斎が記されている。そして実質的な鑄造は大阪造幣局が担当した。またこの時点で、1 万 5 千円あまりの費用を要して鑄型の半分程度ができあがっていた。

実際に、1893 年 3 月の時点で銅像の木型が完成しており、同月 22 日に宮内省の大広間で展覧に供された。こうして銅像制作は順調に進んだように思えるが、鑄型の製造においてはふたつの問題が生じていた。そのひとつが、楠木の面貌に関するものであった。1892 年 11 月 5 日の『読売新聞』の記事によると、「天下一統の後嚴たかしく其子孫を搜索して後患を絶たんと力めたれば足利氏百五十余年間楠のくすとも言ふものなく其の血統遺物もまた殆んど全く跡を失ふに至」ったため、楠木がどのような容貌であったのかについて議論が生じたのであった。そこで人相学あるいは骨相学者にも「或は知勇つとを主とし或は徳望を旨とし甚しきは之に加ふるに一挙数千人を殺戮するの残忍なる氣象を以てし終には不幸短命の相も写す」面貌を占わせたが、やはり納得のいく結果を得ることはできなかったという。最終的には、高村光雲が案出した面貌が可決された。彼のデザインは、「忠節・知謀・勇敢及び徳望にして年齢は四十一二歳恰も金剛山勝軍かちいくさの時代に在りと云ふ」ものであったのである。

こうして再構築された国家的偉人にたる楠木の面貌は、以後各地に創設される楠木銅像のプロトタイプとなるのだった。ちなみに高村はこの 1 年後の 1893 年、現在の東京都の上野公園に置かれている西郷隆盛像の鑄型も手がけている。

（2）馬像にみる近代日本のアンビバランス

楠木の相貌の問題は、当時の名彫刻家高村によって解決された。それは、高村が有していた技術とある種の権威によって解決しうる問題だったと言えるかもしれない。しかし、高村をもってしても解決できない難問が存在した。

先に示した 1892 年 11 月 5 日の記事には、次のような文章が続いている。

其乗馬は實際何れの馬匹を用いたるやをくを詳らかにする能はざれとも先づは木曾馬つまびなるべしとの推測より初めに其骨相を写せしも之以て確乎たる拠り所するに非れば目下馬匹に明達の聞えある同校教授の馬場氏が木曾・薩摩及び陸奥産馬匹の優所を収集し在朝在野の伯樂の評論を経て之れこそ日本良馬の標準なりと言ふべきものに作りたりと当事者の苦心誠に想ひ見るべし

ここにおいて問題となっているのは、楠木が騎乗する馬はいったい何をモデルとするのかということであった。挙げられている木曾産、薩摩産、陸奥産はもちろん日本馬であり、日本国家の象徴となるべき銅像において馬が日本馬であることは自明であるはずだった。しかしながら自明で

あるべき馬の種別こそが、楠木の面貌をめぐる論争とは比較できないほど大きな議論を惹起したのである。森田（1987）はこの問題を美術における技術的問題として扱っているが、それは当時の日本の近代化が抱えていた矛盾を映し出してもいる。

美術は所与ではなく、近代日本における西洋化に深く状況づけられている。様々な美術のジャンルや制度や用語は近代日本における西洋との接触という歴史的産物なのである（佐藤 1996）。こうした当時の日本美術の問題について『読売新聞』は、「九鬼隆一氏の西洋流の観念を以て日本美術を評下してより当事者中に日本西洋の両派を生じ絵画の上に軋轢を来したるよしは嘗て聞く所なり」（『読売新聞』11月14日）と示している。銅像という西洋美術のひとつのジャンルでは、西洋美術の技術とモチーフが前提される。しがたって、「楠公乗馬の銅像は全く西洋馬匹の骨相を写したるものなり」という同日の記事は当然の帰結であった。

しかしながら、楠木が騎乗する馬が「西洋馬」をモデルとしていることは「怪説」とされ、「先頃一旦組立てたる同肖像を写真したるものなれば西洋派の美術家をして親しく之を熟覽せしめ以て怪説の根を絶つべしと言ふ人々少からずといふ」（『読売新聞』11月14日）とあるように、それが西洋馬であっては決してならないと認識する人が多かったのである。なぜなら、この銅像は日本国家の象徴となるべきものだったからであり、それゆえに日本の固有性を指し示す日本馬が希求されたと考えられる。

1896年に4月にこの論争に終止符を打つために、馬の彫刻を担当した後藤貞行が自ら説明を行った。ちなみに新聞記事での紹介によると、後藤は元陸軍人であり、日本画、油絵、写真芸術を学ぶものの、薬品により失明したが、それでもその後高村光雲のもとで彫刻を学び、馬の彫刻にかけては当代随一であったという。その後藤による説明は、次のようなものだった。

而して楠公の乗馬は一見亞刺比亞種の如くなるより或人古実と違へりと咎めけるに氏曰く余が此の馬を彫むに当り余は種々の図に依り遺骨に依り馬具に依り又は自身飼育せる経験によりて古今を参照せり。去れば此馬たる余が理想の馬にして従来の日本産とは稍々異なる処無きに非らざれどそは未だ飼育の宜しきを得ざるの致す所なり。若し日本産にして従来最良の飼育を得んか正に此銅馬に等しき者を造り得るに至るべし。故に余が彫刻は日本名馬の標本と見倣して可ならん（『読売新聞』1896年5月3日）。

つまり、後藤が刻んだ馬は、最良の飼育条件で育成した完璧な日本馬であり、その完璧さゆえに歴史上一度も現れたことのない、したがって誰も見たことのない「理想」の日本馬だということである。だからこそ、日本馬ではない、古実と違うという批判が生じるのだということなのだろう。

この一見荒唐無稽な回答には、近代化を目指す日本の立ち位置が見事に示されているのではないだろうか。天皇制の復活により立ち上がった明治政府は、古代の政治システムを再現し、日本の伝統と純粋性を強調することにより国家の正統性を打ち出した。およそ550年以上も以前に生存し、後醍醐天皇への忠誠を尽くした一武士の銅像が建てられたのは、天皇への忠誠を広く国民に啓蒙するだけでなく、当時の政権や朝廷と現在との連続性を強調する必要があったからでもある。よって、日本的なるものの象徴である銅像の馬に日本馬が求められたのである。

しかしその一方で、近代国家システムを取り入れた日本は、到達すべき目標としての西洋をこの時点ではまだもっていた。西洋にはない固有の日本らしさを強調することで「近代の超克」が可能だという議論はまだこの時代には訪れていなかったから、日本の立ち位置はつねに目指すべ

き西洋との距離によって、つまり西洋で生まれた近代国民国家の枠組みにおいてのみ検証可能なのであった。銅像や彫刻などの西洋美術の一ジャンルへの到達度もまた、西洋美術の枠組みにおいてのみ可能だったのだ。したがって、馬像では「日本馬」ではなく「亜刺比亞種」「西洋馬」でなければならず、日本の伝統と純粋性を強調するための銅像であるために、それが歴史上一度も登場したことがない理想の日本馬であるという弁明も必要だったのである。

ポストコロニアル批評家のホミ・バーバ（2005）は、植民地的主体（宗主国）のシステム内にある植民地的他者（被植民者）の関係においては、後者は前者との距離の中で前者を模倣するものの、ズレが生じてしまうことを説く。これを彼は「アンビバレンス」と表現するが、楠木の銅像制作における馬の論争に見られたのは、まさに近代国民国家をめざす日本のアンビバレンスな状況だと言えるだろう。

1891年に制作がスタートしたものの、1894年から1895年にかけて日本が引き起こした日中戦争により一時制作は中断され、1896年ようやく銅像自体は完成する。しかしそれをどこに設置するかという問題がさらに残され、最終的に宮城前の二重橋に設置されるのは1900年であった。こうして日本人のモデルたる楠木正成は、銅像として理念化され想像/創造され、各地あるいは各小学校に広がっていったのである。

第二次世界大戦が開始された後には「日本精神の発揚」と「誠忠顕彰のため」1939年の朝日新聞には大手門前における和氣清麻呂の銅像設置計画が持ち上がっており「宮城外苑の尽忠の無精楠公の銅像と遠く相對して大手門外に至誠の文臣の気高い姿が仰がれ」ることが期待されているが、それが実際に成し遂げられたのかどうかは不明である（『東京朝日新聞』1939年3月10日）。

IV おわりに

本稿では湊川神社の成立と宮城前への楠木正成銅像設置の過程を追いながら、近代日本におけるナショナリズムのありようの一側面を提示した。楠木正成の霊を祀る湊川神社の思想は江戸時代末期の尊皇攘夷思想における招魂社の思想あたりまでさかのぼることができ、天皇を頂点にいただく古代政治形態の復活を一方で掲げた明治政府において、それは有意であったといえる。近代国民国家システムと古代への希求という矛盾は、楠木をはじめとする歴史的人物の表象が国民国家のモジュールとして貢献するという点において、すなわち、古代への希求が現在の政権とナショナルアイデンティティの正当性を保証するという点において、容易に解決しえたのであった。

1872年に創建された湊川神社は、天皇への忠誠を物質的に可視化し、ナショナルアイデンティティを下支えすることが期待されていた。それゆえに、1872年にはよりはっきりと楠木の死を人びとに示すために、堂宇が取り外され代わりに柵が設けられたのであり、また天皇行幸に際しては湊川神社へ立ち寄ることが繰り返し請願されたのである。さらに、1890年からは天皇イデオロギーを体現する宮城前に、10年の歳月を要して楠木正成の銅像を設置したことは、近代日本における国民国家とナショナリズムの確立を検討する上で見逃すことはできないだろう。

しかし、神武天皇や楠木正成といった国民的英雄を再構築する一連の過程において、古代を希求しながら近代化を推しすすめるという矛盾が顔をのぞかせていた。そのひとつが宮城前に楠木銅像を設置する際に生じた馬の形態の問題であった。日本的なるものを西洋美術という枠組み

で表現せざるをえないという引き裂かれた状況は、近代に埋め込まれ西洋をたえず目標とせざるをえなかった日本の必然であったと言えよう。この時期の日本には、まだ西洋を真に対象化することが困難だったのである。

湊川神社、銅像などの物的装置を通して形成されつつあった楠木をテコとしたナショナルアイデンティティの創出様式は、南北両朝の正統性をめぐる議論において確立されたと考える。この問題は、教科書の記載内容から生じており、国家のイデオロギー装置としてとくにアルチュセールが学校教育に注目していたことを想起すれば、教科書問題とナショナルアイデンティティの問題として別稿にて検討する必要がある。もちろん、西洋を物質的文明と規定し、それに対して日本が有する内在的な力を強調することで日本独自の脱近代化をもとめる時期においても楠木の果たす役割は減退せず、むしろ増した。こうした過程は、前稿（森 2005）で示したナショナルアイデンティティに対するイデオロギーを不断に再生産するプラティック、重層的決定という概念を差し挟むことによりより明確に捉えうると考える。これについても別稿にて検討したい。

参考文献

- アルチュセール、L（柳内隆・山本哲士訳『アルチュセールの〈イデオロギー〉論（新装版）』2005、三文社
 Althusser, Luis *Essays on ideology*. London: Verso Books, 1984.
- アンダーソン、A.、白石さや、白石隆訳（1997）『増補 想像の共同体』NTT出版会 Anderson, Benedict
Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, London: Verso Books, 1991
- 小林健三・照沼好文（1969）『招魂社成立の研究』
- 佐藤道信（1996）『「日本美術」誕生—近代日本の「ことば」と戦略』
- バーバ、H.、本橋哲也訳（2005）『文化の場所』法政大学出版会 Bhabha, Homi *The location of culture*,
 London: Routledge, 1994.
- 原 武史（2003）『皇居前広場』光文社
- 藤巻正之（1939）『湊川神社六十年史 本篇・資料篇』湊川神社社務所
- 村上重良（1974）『慰霊と招魂-靖国の思想-』岩波新書
- 森 正人（2005）「節合される日本文化と弘法大師」地理学評論 78-1
- 森田康之助（1987）『湊川神社史 鎮座篇』湊川神社

Abstract

**What is Loyalty? : ideological state apparatus
and its contradiction in modern Japan
Masato MORI (Mie University)**

My aim here is to provide the complex aspects in the Japanese modernization from the late 19c to the early 20c highlighting the revival of historical character Masashige Kusunoki who lived in the 13c and 14c. Especially I focus on its materializing process; the establishment of a shrine, the placement of a monument and the fixture of the legitimacy of emperor. As Anderson (1991) pointed out clearly, a modern nation-state system with a specific *module* had been invented in European countries, and following countries accepted it to be modern nation-state. As this *module* of nation-state, museums played a significant role to show the nation our history connecting the past and the present. Japanese modern government which took over the regime from the *Edo Bakufu* (Samurai government from 1603-1867) established the imperial museum in 1900 and gathered many materials concerning imperial house.

In understanding the national ideology, Althusser's idea of ideology will be helpful. Althusser (1980) stressed the work of the ideological state apparatus to transform individuals into be *subjects*. This ideological calling is accomplished with a materiality which reproduces the social relationships. In short the ideology exists within the apparatus or the practices of apparatuses. These practices embody the ideology, and national ideology is constituted and maintained within the apparatus or the practices of apparatuses.

The two tensions in Japanese modernization have been pointed out by many studies; on the one hand it tried to catch up the Western countries by establishing material infrastructure and so on. On the other hand it revived a classic political system which placed emperor on the top. Therefore Masashige Kusunoki had taken the notable role as a national hero to concrete historical continuity from the past to the present, and to invoke the people's loyalty to emperor and nationalism, as it was spoken his death was for emperor based on the loyalty to emperor, in the Japanese modernization. He had taken a role to call individuals to be a subject of nation-state.

The late Edo period had the active *Sonno-Joi* movement for the exclusion of interventions of foreign countries and the protection of Japanese, especially emperor's purity. This movement stressed some historical individuals who related to emperor, and among them Kusunoki was specific. Therefore they had ceremonies to celebrate the spirit of Kusunoki and planned to construct the shrine that was dedicated not to god but to human Kusunoki.

This plan was accomplished by Meiji government which was the first modern government in Japan. For example it established many special shrines *Shokon-sha* to enshrine the human spirits of the war dead occurred in the beginning of Meiji period. In this process *Minatogawa* shrine in *Minatogawa* where Kusunoki had died for emperor, in Kobe city, was established for enshrining Kusunoki's spirit in 1870. At first wooden boards covered the monument of Kusunoki, but the boards were removed, and the new fence was built instead to make it visible for people from the

Hyogo prefecture (Figure 1). *Minatogawa* shrine established a small shrine in Tokyo to cultivate national loyalty too. In short it *must have been seen* by people because it was the visible symbol for loyalty to the emperor.

Showing the relationship between royal house and Kusunoki, Minatogawa shrine had asked the government to lead emperor there for several times. In 1875 emperor visited Minatogawa shrine and awarded Kusunoki a rank. This remarkable visit ensured the orthodoxy of the shrine and Kusunoki. This shrine visualized a significance of the loyalty to the emperor and integrated the national identities.

In 1900 the government placed the bronze statue of Kusunoki just outside the *Kyūjō* (imperial palace; now it is called *Kōkyō*) in Tokyo. This had been planned in 1890 but it was delayed due to some problems. A famous sculptor, Kōun Takamura, who made another bronze statue of national hero at the break of modern nation state, Takamori Saigo, lead this project and made the face of Kusunoki. Another sculptor Sadayuki Goto made the horse which Kusunoki rode on.

In this process some discussions took place and I paid attention to two controversies; what Kusunoki looked like and what kind of horse was appropriate. The former related to the fact that there were a few visual materials of Kusunoki and a sculptor could not have a model to carve. This was somehow solved by Takamura, however another issue about shape and type of horse remained. If they regarded a historical correctness as important, they had to choose Japanese. However if it had, it was not suitable for European art style due to the size of Japanese original horse. In short it was controversial issue because, on the one hand it was the issue concerning the historical correctness, on the other hand it was the issue of negotiation between the Japanese and the framework of Western art. The completed product looked like an Arabian horse and the sculptor explained it in the convoluted logic; it was modelled on the highest-grade Japanese horse which never appeared in Japanese history. In fact, it was an idealised shape (Figure 2).

This conclusion implies the ambivalence of non-West European countries aiming to be modern nation state (Bhabha1994). These countries could identify their own selves only within European framework. If the statue was indeed aimed to be a national symbol, it must have accepted Japanese horse, which was not within European art style and concept. The seemingly contradictory conclusion indicates the ambiguity of Japanese modernization.